震災から見える地域

前川　良太

先月の巻頭にいつもと変わらないお正月をと書いていながら（原稿は旧年中でしたので）、年末から年始にかけて我が家でインフルエンザが猛威を振るっていまして、家から一歩も出ない実にイレギュラーな幕開けでした。病床で横たわりながら連日テレビのニュースで能登の震災の報道を目にし、身体だけでなく心もつらい日々でした。１月は阪神淡路大震災の時期でもありましたね。その頃私はアトムっ子のぞう組さんでしたが、今でもはっきり揺れの大きさを覚えています。そして昨年の夏は全国保育団体研究集会（合研）で福島に行ったので、主に原発関連の被災地を見て回りました。大きな災害は起きないに越したことはないですが、他人事とは思えない被災地の現状に、職員それぞれも身が引き締まる思いでした。

ちょうど長男が生まれた年に大阪北部地震が起きました。朝８時頃、私はすでに出勤していて保育中でした。自宅に残してきた生まれたばかりの我が子と家族のことが気がかりになりながら、早くから登園していた子どもたちの身の安全を確保し、何とか落ち着いた頃に育休中だった妻に連絡をして家族の無事を確認したのでした。妻はマンションから飛び出して、近所の人も外に出てきたのでほっとしたと話していました。

私たちの仕事はいざとなれば子どもたちのために、地域のために、家族を後回しにしてでも役割を果たさなければいけない時が訪れます。それはとても重い事実です。能登の現状を職員同士で話していると、時として後回しになってしまう家族のことを思い、やるせない気持ちになる職員がいたこともまた事実でした。保育士なのだから果たして当然、と乱暴に言えないような正直な気持ちです。もちろん、「大変な状況をほっぽり出して私は家族のところに行く！」という意味の言葉でもなかったからなおさらです。しかしそう思いながらも、私はこうも思うのです。「自分も地域の人間なら、子どももまた、地域の子どもだ」と。私はここで災害が起きたらきっと地域のため、子どもたちのため、ここに集う大人のために、最後まで園に居続けるでしょう。だけどそんな間にも、我が子や家族もまた、そんな地域の誰かに守られて過ごすのだと思うのです。そう思うと、どの地域のことも他人事ではないですね。

そして何も災害に限ったことではありません。小学校へ行けば、親の目の届かない地域の中で過ごす時間がどんどん増えてきます。心配だからと、ずっと監視しているわけにはいきません。だからこそ子どもが過ごす地域が安心できる場になるように、保護者同士がお互いの子のことを知っていることは大切なことだと思うのです。そんな思いで毎年５歳児クラスでは小学校への引き継ぎの内容を、個人懇談ではなく、クラス懇談で一緒に考え合います。子どもは親だけで守り育むのではなく、地域みんなで包み込んでいきたいですね。そしてそんな親である私たちも、だれかにとっての地域の一人であるということが大切です。被災地で必死に助け合って命をつなぎ合う人々の姿を、明日の私たちに重ねて、どんな地域の一人でありたいか、改めて考える機会になりました。

※たくさんのご寄付ありがとうございます。もう少し募金箱を置いておくので引き続きご協力お願いします。